

● 白州だより

2011年3月6日
二十四節気 啓蟄
発行 白州郷牧場
山梨県北杜市白州町横手 2259
TEL : 0551-35-4520
FAX : 0551-35-2970

白州郷牧場からの春のおたよりをお届けします！ <http://www.hakusyu.jp/> info@hakusyu.jp



「第四の波がやってくる、 私たちは中世に向かう」

世界は激動をはじめた。アラブ、ペルシャの湾岸諸国を新しい波がおそっている。かって六十年代後半の若者の反乱は「権力によらず世界を変えた世界革命」と歴史の評価が定まってきたようである。しかし、新興国の若者の反乱は六十年代よりは、はるかにスケールの大きなものになるに違いない。六十年反乱の世代は、第二次大戦後のベビーブーマーの世代である。彼ら過激な活動家は、今は老人になり、孫を抱き、豊かになった者は現状維持を願っている保守派となった。かって対立した反対物になったのである。戦後の65年の歳月の内、半世紀の時間をかけてマグマは確実に新興国で育っていたのである。北半球は資源の独占と工業化によって栄えてきた。しかし今、北半球から南半球への軸足の移動が始まろうとしている。文明のパラダイム転換は、もはや避けられない。エジプトやアラブ世界の人口の50%は30歳以下という。フィリピンは20歳以下が60%という。インドに至っては25歳以下

が50%だろう。新興国と呼ばれる国々は、ほぼ同じ状況であろう、そう遠くない将来、人口は70億を超え、100億に向かう（向かえるとしたら）。新興国は食糧を二倍に増産しなければならず、先進国を含めて、世界は今より70%増産しなければならないという。そういうことが可能かどうかではない。人口で圧倒的な多数を占める新興国の若者は、まだ、世界史に応答していないということである。彼らが歴史に発言した時、先進国は回答を持ってはいまい。日本人なる者は、われわれなる者がどこかで途切れ、個人に原子化されてしまった。人は産まれたときから等しくない。しかし、人々は平等感を欲している。ところが人は平等感を欲しながら自分だけは特別でありたい、と思っている。不思議な生き物だ。

われわれなる者が途切れ、個人に原子化されたのも、そういう思想が基底にあるのであろう。単純に言ってしまうと、日本人は”仁義”を捨てたのであろう。時代の波は、江戸を下って中世まで、私たちを押し流すかもしれない。ならば、われわれは、自ら進んでわれわれなる者が確実に存在した中世に向かおうと思う。

西山連山の奇峰、甲斐駒ヶ岳の恵みの中で、私た



ちは農業を営み、暮らしている。茨城の清水潔さんは言う。「田んぼで米を作り、畑で野菜を作り、それを食べ、地べたを這うように生きていれば、どんな世の中が来ても大ケガはない」と。その通りだろうと思う。

甲斐駒ヶ岳山麓は、黒源太（源清光）の弟、信義が牧を開いた土地である。三代かけてわれわれも牧を開き、中世に向かう。そして、甲斐駒を信仰する農民集団へと変貌しながら胡桃（くるみ）の木を植える。

誤ったときに誤った場所で、牛を飼い、胡桃を植えることのないよう研究を続けていく。これから問われるのはもうお金ではあるまい。「われわれなる者」と「生存」になるに違いない。（椎名 盛男）

「子牛の誕生」

子牛が産まれました。ここ数年なかなか種がつかなかったのですが、やっと産まれました。牛舎の床は悪臭はなかったのですが、ぬかるんでいたこともあり、牛が安心して子を産むことができるよう徹底して床の改造を行い、今は快適な環境になりました。すると、次々に妊娠し、あと三頭が産まれる予定です。牛が安心し、快適に暮らせる環境づくりが

結局は人に利益をもたらすということがよくわかりました。韓国のダンナモ農場の李さんの言っている通りでした。そもそも和牛の牛は、大分県の久住へ二十年近く前に訪問したとき、加藤先生の紹介による、系統牛の繁殖をやっているKさんとの出会いでした。牛一水田一草地の複合経営の見事な体系に感銘を受けたことがあります。母牛が丁寧に子牛の世話をしている母子の姿を見て、即、導入を決めました。年老いたら、牛と余生を村里で過ごそうと思ったこともありますが、ともすれば、母子関係が崩壊しているというよりはよくわからなくなっている社会にあって、牛の母子関係を子供たちに見せることは「キララの学校」にとって、とても意義ある立派な教材になると思ったことが動機でした。そして、三頭のもと牛を導入しました。平茂、糸福、第七糸桜、という名牛の子牛たちでした。三頭の子牛（牝）は立派な母牛になり、たくさんの子牛を産み、育て、おばあちゃんになり、老衰で旅立っていきました。一番多く子牛を産んだ母牛は、十六頭の子牛を産みました。

一月から、私たちは、中世武士団登場の前史の調査研究を、山梨の北巨摩を中心にフィールドワークを精力的に続けています。ぼんやりですが、子牛が群れ、胡桃の実が実る村里へ向かうのかもしれない。



子牛（2011.2.13 白州郷牧場牛舎）



クロッカス（2011.3.2「おっぼに亭」前で）

「春」

クロッカスの花が咲き、春を告げた。春一番も吹いたと言う。農場も残雪の中、越冬ホウレン草の収穫が始まった。クロッカスと言えば、昨年は、三月に咲いた。それまでは三月下旬から四月上旬に咲いていた。梅のつぼみも大きくなってきた。環境は完全に温暖化している。今年も熱波がやってくるのか。大雨、洪水となるのかわからない。けれども、どちらかに極端に傾くに違いない。

とまれクロッカスは咲いた。山里にも春はそこまで来ている。

クロッカスの花が咲くとホウレン草の種を下ろせる。農場はレタスの定植に入り、ゆっくりと春を待ち受ける準備に入った。私たちは、この三年、旧暦を山野草と結びつけ、播種もその時期を研究してきた。成果はすこしずつ出ている。

「麴づくり、味噌づくりが始まる」

恒例の麴づくり、味噌づくりがはじまりました。年々、参加者が増え、地域に貢献できる加工所も少しずつ形が整いつつあります。

今年は、農場の阿部君が、麴づくりの研修に入り、職人を目指すことになりました。



若い人が日本の伝統食である麴づくりの職人になるのは、将来にとって、とても良いことのように思

います。

また、麴を使った料理の研究も始まり、古代米（黒米、赤米）の麴づくりも実験的にはじまりました。

「短い文章を書く練習」

今回はちょっと趣向を変えて、短い文章をさくつと書いてみたいと思います。

① 農耕のはじまりは、墓参りにあるのではないか。人間は墓をたてて死者を弔うが、動物はそういうことはしない。ある日、一人の古代人が墓前に木の実をたむけた。その実のなかの種子が芽を出し、いくつもの実をみのらせたのだ。この古代人はきっと仰天したことだろう。彼はこれを死者からの返礼だと考えたに違いない。こうして農耕は死者供養とともに始まった。たぶん。

② 旧約聖書の創世記に登場するノアの方舟とは、都市国家からの独立を目指した農村共同体のことだったのではないか。神の怒りによる洪水とは、何らかの社会的混乱のメタファーであり（暴君による圧制とか、戦争、飢饉、もしくは迫害）、そこから

距離を置いて自活する道を選んだ人々がいたのだ。動物のつがいとともに。この物語が示しているのは、社会のメインシステムが壊滅的な状況に陥ったとき、すみやかに生存を目的とするサブシステム（方舟）を組み立てる必要があること。そして混沌とした状況は、それが収まるまでじっと待つしかないということなのでは。ネグロス島のカネシゲ・ファームでそんなことを考えていた。

③ エコカー減税も家電エコポイントも環境への配慮を謳っていたが、どうにか消費者に商品を買わせて景気の底上げをしたいという魂胆が透けて見えていた。産業革命以降、あらゆる社会が当然のこととしてきた大量消費と大量廃棄。それに伴う環境破壊を告発するためにあった「エコロジー運動」も、欲望を換気するための宣伝文句として利用されてしまっただけだ。

（牧場スタッフ：内藤光）

「キララ春の学校」が、2011年3月26日(土)～30日(水)に開催されます！

～春の息吹を感じて 種まきなど畑の準備～

春を待ち望む白州より「キララ春の学校」のお知らせをお届けします。3月に入ると寒さも緩み出し、一斉に春・夏野菜の準備が始まります。今年の春の学校は5日間です。例年より少し早い日程となっています。

春の学校では、恒例の、野菜や花の種まきや定植、野草摘み、ヨモギ餅作り、村のオババ達に教えてもらいながら、野草の料理も作ります。他にもフィールドに出て、おもいっきり白州の春を感じるプログラムを中心に、「白州シアター」、「麴（こうじ）講座」、「ひよこの話し」など盛りだくさんです。

詳細は、<http://www.hakusyu.jp/kilala/> で。

お問い合わせはお電話か、電子メール info@hakusyu.jp にてお受けします。また右のQRコードを読み取っていただくことで、携帯電話からも「キララの学校」の最新情報をご覧になれます。

